読んでみよう

# カレーライス

重松清 作
唐仁原教久 絵

84ページで取り上げている物語です。他の重松清さんの作品とあわせて読んでみてもいいですね。

1 ぼくは悪くない。

2 だから、絶対に「ごめんなさい」は言わない。言うもんか、お父さんなんかに。

「いいかげんに意地を張るのはやめなさいよ」。お母さんはあきれ顔で言うけど、あやまる気はない。先にあやまるのはお父さんのほうだ。

3 確かに、一日三十分の約束を破って、夕食が終わった後もゲームをしていたのは、よくなかった。だけど、セーブもさせないで、いきなりゲーム機のコードをぬいて電源を切っちゃうのは、いくらなんでもひどいじゃないか。

「何度言っても聞かなかったんだから、しょうがないでしょ。今夜お父さんが帰ってきたら、ちゃんとあやまりなさいよ。いいわね」。

4 お母さんはいつもお父さんのみかたにつく。

5 やあだよ、と言い返す代わりに、ぼくはそっぽを向いた。お父さんにしかられたのは、ゆうべ。丸一日たっても「ごめんなさい」を言わなかったのは新記録だった。

「いい。今夜のうちにあやまって、仲直りしときなさいよ。あしたから『お父さんウィーク』なんだから、けんかしたままだとつまらないでしょ、ひろしだって」。

6 毎月半ばの一週間ほど、お母さんは仕事がいそがしくて、帰りがうんとおそくなる。その代わり、お父さんが夕食に合わせて早めに帰ってくる。それが「お父さんウィーク」だ。

「お父さん、ひろしがよくないことをしたらしかるけど、ひろしのことが大好きなのよ。分かるでしょう。今朝も、『ひろしは、まだすねてるのか』って、落ちこんでたのよ」。

7 ほら、そういうところがいやなんだ。ぼくはすねてるんじゃない。お父さんと口をききたくないのは、そんな子どもっぽいことじゃなくて、もっと、こう、なんていうか、もっと――。

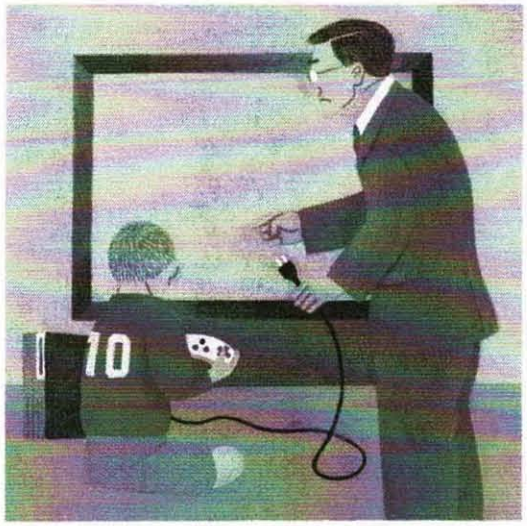
「『特製カレーを食べれば、きげんも直るさ』って張り切ってたから、晩ご飯の前におかし食べたりしないでよ」。

「またカレーなの」。

「文句言わないの。だったら自分で作ってみれば。学校で家庭科もやってるんでしょ。六年生になったのに、遊んでばかりで家のことちっともしないんだから、全く、もう――」。

お母さんはいつだって、お父さんのみかただ。

8 それがくやしかったから、何があっても絶対にあやまるもんか、と心に決めた。



- 絶対
- 張る
- 破る
- セーブ ここでは、ゲームのとちゅうで内容などを保存すること。

「お父さんウィーク」の初日、お父さんは、さっそく特製カレーライスを作った。

「ほら食べろ、お代わりたくさんあるぞ」

と、ごきげんな顔で大もりのカレーをばくつく。

9 でも、お父さんは料理が下手だ。じゃがいもやにんじんの切り方はでたらめだし、しんが残っているし、何よりカレーのルウが、あまったるくてしかたない。

10 カレー皿に顔をつっこむようにしてスプーンを動かしていたら、お父さんが、

「まだおこってるのか」

と、笑いながら言った。

「ひろしもけっこう根気あるんだなあ」

11 根気とは、ちょっとちがうと思う。どっちにしても、返事なんか、しないけど。

「この前、いきなりコードぬいちゃって、悪かったなあ」

あっさりあやまられた。最初の予定では、これでぼくもあやまれば仲直り完了。——のはずだったけど、ぼくはだまったままだった。

「でもな、一日三十分の約束を守らなかったのは、もっと悪いよな」

12 分かってる、それくらい。でも、分かってることを言われるのがいちばんいやなんだってことを、お父さんは分かってない。

「で、どうだ。学校、最近おもしろいか」

13 ああ、もう、そんなのどうだっていいじゃん。言葉がもやもやとしたけむりみたいになって、むねの中にたまる。

14 知らん顔してカレーを食べ続けたら、お父さんもさすがにあきらめたみたいで、そこからはもう話しかけてこなかった。

15 「お父さんウィーク」の初日は、そんなふうに、おしゃべりすることなく終わった。

◆下手（へた）



16 次の日の夕食も、カレー。ゆうべの残りを温め直して食べた。ふつうのカレーだと、一晩おくとこくが出ておいしくなるけど、特製カレーのあまったるさは変わらない。

「なあ、ひろし、いいかげんにきげん直せよ。しつこすぎないか」

17 お父さんは、夕食のとちゅう、ちょっとこわい顔になって言った。

18 ぼくも本当は、もう仲直りしちゃおうかな、と思っていたところだった。でも、先手を打たれたせいで、今さらあやまれなくなった。ここであやまると、いかにもお父さんにまたしかられそうになったから——みたいで、そんなのいやだ。

「もしもうし、ひろしくうん、聞こえてますかあ」

19 お父さんはてのひらをメガホンの形にして言ったけど、ぼくがだまったままなので、今度はまたおっかない顔にもどって、

「いいかげんにしろ」

とにらんできた。

20 ぼくはかたをすぼめて、カレーを食べる。おいしくないのに、ばくばく、ばくばく、休まずに食べ続ける。

21 自分でもこまってる。なんでだろう、と思ってる。今までなら、あっさり「ごめんなさい」が言えたのに。もっとすなおに話せてたのに。特製カレーだって、三年生のころまでは、すごくおいしかったのに。

22 二人でだまってお皿をかたづけているとき、お父さんは、

「頭がいたいなあ」

とつぶやいて、大きなくしゃみをした。

23 かぜ、ひいたんじゃないの——。

24 薬を飲んで、早くねたほうがいいんじゃない——。

25 言いたかったけど、言えなかった。

26 翌朝、自分の部屋から起き出したぼくと入れかわるように、お父さんは、

「悪いけど、先行くからな」

と、朝食も食べずに家を出ていった。「お父さんウィーク」では、よくあることだ。会社から早く帰ってくる分、朝は一番乗りして、ゆうべできなかった仕事をかたづけるのだ。

27 お母さんはまだねている。これも、「お父さんウィーク」のいつものパターン。仕事がいそがしい一週間のうち、特にいそがしい何日かは、家に帰るのが真夜中の二時や三時になる。その代わり、次の日はふだんより少しだけゆっくり出勤すればいいのだという。

28 食卓には、目玉焼きと野菜いためのお皿が出ていた。黄身がくずれているから、お父さんが作ってくれたのだろう。朝は時間がないんだから、おかずなんか作らなくてもいいのに。目玉焼きぐらい、ぼくはもう作れるのに。

29 でも、お父さんは、

「火を使うのはあぶないから。」

と、オーブントースターと電子レンジしか使わせてくれない。それがいつもくやしくて、でも、お父さんがねむい目をこすりながら、ぼくのために目玉焼きを作ってくれたんだと思うとうれしくて、でもやっぱりくやしくて、そうはいってもうれしくて——。「いってらっしゃい。」を言わなかったから、急に悲しくなってきた。

30 朝食を終えて自分の部屋にもどったら、ランドセルの下に手紙が置いてあった。

「お父さんとまだ口をきいてないの。お父さん、さびしがっていましたよ。」

31 絵の得意なお母さんは、しょんぼりするお父さんの似顔絵を手紙にそえていた。

得意



32 学校にいる間、何度も心の中で練習した。

33 お父さん、この前はごめんなさい——。

34 言える言える、だいじょうぶだいじょうぶ、と自分を元気づけた。

「うげえっ、そんなの言うのってかっこ悪いよ。」と自分を冷やかす自分も、むねのおくのどこかにいるんだけど。

35 夕方、家に帰ると、お父さんがいた。

「かぜ、ひいちゃったよ。熱があるから、会社を早退して、さっき帰ってきたんだ。」

36 パジャマすがたで居間に出てきたお父さんは、本当に具合が悪そうだった。声はしわがれて、せきも出ている。

「晩ご飯、今夜は弁当だな。」

37 お父さんがそう言ったとき、思わず、ぼくは答えていた。

「何か作るよ。ぼく、作れるから。」

「えっ。」

「だいじょうぶ、作れるもん。」

38 お父さんは、きょとんとしていた。でも、いちばんおどろいているのは、ぼく自身だ。

「家で作ったご飯のほうが栄養あるから、かぜも治るから。」

39 なんて、全然言うつもりじゃなかったのに。

「いや、でも——。」

と言いかけたお父さんは、少し考えてから、まあいいか、と笑った。

「お父さんも手伝うから。で、何を作るんだ。」

40 答えは、今度も、考えるより先に出た。

「カレー。」

「だって、おまえ、カレーって、ゆうべもおとといも——。」

「でもカレーなの。いいからカレーなの。絶対にカレーなの。」

41 子どもみたいに大きな声で言い張った。

居間　弁当

42 ほっぺたが急に熱くなった。
「じゃあ、カレーていいか。」
43 お父さんは笑って、台所の戸だなを開けた。
「おととい買ってきたルウが残ってるから、それ使えよ。」
44 戸だなから取り出したのは――甘口。お子さま向けの、うんとあまいやつ。お母さんが、
「ひろしはこっちね。」
と、ぼくの分だけ別のなべでカレーを作っていた低学年のころは、ルウはいつもこれだった。
「だめだよ、こんなのじゃ。」
45 ぼくは戸だなの別の場所から、お母さんが買い置きしているルウを出した。
「だって、ひろし、それ『中辛』だぞ。からいんだぞ、口の中ひいひいしちゃうぞ。」
「何言ってんの、お母さんと二人のときは、いつもこれだよ。」
46 お父さんは、またきょとんとした顔になった。
「おまえ、もう『中辛』なのか。」
意外そうに、半信半疑できいてくる。
47 ああ、もう、これだよ。お父さんって、なあんにも分かってないんだから。
48 あきれた。うんざりした。
49 でも、
「そうかあ、ひろしも『中辛』なのかあ、そうかそうか。」
と、うれしそうに何度もうなずくお父さんを見ていると、なんだかこっちまでうれしくなってきた。
50 二人で作ったカレーライスができあがった。野菜担当のお父さんが切ったじゃがいもやにんじんは、やっぱり不格好だったけど、しんが残らないようにしっかりにこんだ。台所にカレーの香りがぶうんとただよう。カレーはこうでなくっちゃ。
51 お父さんは、ずっとごきげんだった。
「いやあ、まいったなあ。ひろしももう『中辛』だったんだなあ。そうだよなあ、来年から中学生なんだもんなあ。」
と、一人でしゃべって、
「かぜも治っちゃったよ。」
と笑って、思いっ切り大もりにご飯をよそった。
52 食卓に向き合ってすわった。「ごめんなさい。」は言えなかったけど、お父さんはごきげんだし、「今度は別の料理も二人で作ろうか。」と約束したし、残り半分になった今月の「お父さんウィーク」は、いつもよりちょっと楽しく過ごせそうだ。
「じゃあ、いただきまあす。」
53 口を大きく開けてカレーをほお張った。
54 ぼくたちの特製カレーは、びりっとからくて、でも、ほんのりあまかった。

重松 清
一九六三年、岡山県生まれ。作家。「さみの友だち」「娘に語るお父さんの歴史」などの作品がある。

編 絶 張 破 得 居 弁

288ページ